

# 情報技術の匠

PROFESSIONAL

第45回  
ソフトウェア開発の匠

## 最初が、肝心

山本はいつだって実践派だ。研究員というと、部屋にこもり、自らの研究に没頭して…というイメージを持たれるかもしれない。しかし山本は常にお客様と向き合い、「現場での要請は何か?」「お客様が本当に必要とされているのは何か?」を考え、行動し、自分の研究へのパワーに変える。こうした山本の「行動様式」は、IBM 東京基礎研究所での取り組み、そして山本がライフワークとして取り組む空手の世界から学んだものだ。

空手と仕事。いずれも山本は「最初に興味を持ってもらう。そこをど

うするかというのが重要ですよね」と言う。まず空手でのエピソード。アメリカでの出張期間に、山本は、25年以上続けてきた経験を生かして現地の道場で空手を教えていた。道場長は、修羅場をくぐった元麻薬取締官で1万人の住人を守る警察署長。そこに100kgを超える巨漢、力自慢の道場生たちが集う。そこで山本が最初に行ったのは、「武道は力ではない」というデモンストレーションだった。

「体力、腕力に関係なく、手をつかまれた時に外す技があります。逆につかんだら外せない技もあって、これで彼らの手をつかむんです。そうすると『何で外せない

んだ!』と驚く。彼らには魔法に見えるんですね。そこで初めて理屈を教えてあげる。最初から理屈を言っても、体力差がある彼らは信じることはありません。しかし、この場合は目の前で見ていますから納得の仕方が違う」

驚きの後だからこそその納得。目の前で体験したからこそ理解することができる。そこから道場生たちも山本を信頼し、空手の深層に触れ、真剣に真摯に向き合うことになる。

闘い、というわけではないが真剣勝負の場面は仕事でも一緒だ。空手の指導と同様、山本はファースト・インパクトで勝負に出る。

「まず、お客様にご提案する前に、レディーに近い状態までプロタイプを作り込みます。ここで営業と相談をします。営業も自分で心の底からお客様にアプローチできるものがあつた方が、提案がしっかりとできますから。それを抱えて一緒にお客様のところへ行く。ここまでのレベルになっていればお客様にも本気の議論に入っていただけますし、現実的なご要望を拾っていただける」

ソフトウェアの改良、システムの再構築などは、すでに形になったものがあるのでお客様と提案側にあ



### 山本 学 (やまもと がく)

日本アイ・ビー・エム株式会社  
ソフトウェア開発研究所  
IM 開発&サービス

#### 【プロフィール】

1991年東京基礎研究所入所。通信プロトコル関連技術の開発、「待ち行列」を用いた業務システムの性能予測技術の研究、移動エージェント「AGLETS®」への参画を経て、エージェント・サーバー研究プロジェクトをリードし、IBM Agent Frameworkを開発。2003年より業務システム高速化技術の研究に着手し、IBM WebSphere® eXtreme Scaleに技術供与。2008年よりソフトウェア開発研究所に異動し、新しい高速化技術の研究開発をリード。情報学博士。

る程度の共通理解がある。お客様も実際に使ったものだから要望も出しやすいし、改善点も見えやすい。しかし、山本の場合、まったく新しい研究成果をお客様に理解していただくことから仕事が始まる。だから最初が、肝心。

「今までにない体系のものがボンと出てきた時には、『なんじゃこりゃ?』ですよ。だから初めにお客様にしっかりイメージしていただけるものを出さないと」

最初に共有して、そこから徹底的に議論を進める。最初は山本の頭の中にあったものが、その過程を経て実際の仕組みに変わっていく。そこからいよいよお客様との議論という真剣勝負。お客様からの厳しい要望こそ受け止めたい、と山本は思う。

「そこが大事なんです。技術者の勝手な想像で『こういう機能が必要だろう』と作っていくのは簡単。すごく簡単なんですけれども、それをお客様と共有しないで進めると、不必要な機能がたくさん入った技術ができてしまう。それでは駄目なんです。だから目に見える形で早くお客様と共有しなければいけない」

不必要な機能を最大の売りのように誇らしげにぶつけてくる。そんな独り善がりの研究・開発者は、お客様にとって何の価値もない。いつまでも自分の頭の中だけで構築していくとそのわなにはまる。だからこそ山本は、早々に形あるものを共有し、そこから一緒に作り上げていくこととするのだ。

もちろん、すぐにサービスインで

きるほどの状態までプロトタイプを作成するのは並大抵の労力ではない。開発は時間との闘いにもなる。1年かけたいところを半年で、半年かけたいところを3カ月で…。その時の集中力と突破力が山本の持ち味でもある。通勤の30分がもったいない。電車の中でノートPCに向かって自分のアイデアを整理することも多い。

「よく一駅乗り過ごすことがあるんです。集中すると周りが見えなくなってしまうのかなあ」(苦笑)。

集中して取り組めば、きっと困難は突破できる。一刻も早く「最初の立ち会い」の場をつくるために、山本は一気呵成<sup>かせい</sup>に攻める。

「空手では攻めるよりも、相手の動きに合わせて、かわして、すきをつくタイプですけど(笑)。だからといって自分の型を崩してまで相手に合わせてはいけません。このあたりは仕事と一緒にです。お客様の要望に合わせていけるけれど、その前のプロトタイプ作りでは、『自分のやっているこのシステムは絶対にいいものなんだ!』という信念を持って取り組まなければいけないと思っています」

山本には2つの目標がある。

「青臭い言い方ですけど、自分の技術で、できるだけ世の中に貢献したい。もう1つは、ほかにない技術をやりたい。世の中にたくさんある技術の中でナンバーワンというのではなく、いわゆるオンリーワン。今のところ、私のやってきたことを振り返ると、結果的にそうなっている気はします」

「常に私は『はざま』なんですよ」と山本は笑う。例えばエージェント技術。エージェントの研究には専門家がいます。しかしそこに、製品化や実用化のためにミドルウェアのテクノロジーを持って参画している人間は少ない。ここにミドルウェアが得意技である山本の「オンリーワン」がある。お客様とともに闘う場でのキーワードは「実用化」だ。研究を成果に直結させること、できること。山本の目標は山本自身の実践の延長線上にある。

最後に、「尊敬する人は?」という質問に山本は「空手の先生です」と即答した。先生のエピソードはさまざまある。一人で世界に支部を持つ組織を作った。実戦的な空手を創出した。今、市販されているものよりもはるかに安全な防具を50年以上も前に作り上げた…。その中でおそらく山本が自身と照らして最も尊敬の念を抱いているのはこれだろう。

「伝統的な技術も全部学び、実用的な技へ改良する。空手・中国武術の歴史研究も行う。70歳を越えてなお…。その上で自分のやっていることには抜けているところがいくらでもあるから、みんながみつけてどんどん研究しろ、って言っているんですよ。かなわないですね」

研究者のプライド。自分が積み上げてきたものは否定しづらい。しかし、自分の中で固まったものを皆で考え、さらに良いものにしていく。30歳以上離れた師匠に、柔軟さで負けるわけにはいかない。